

子供の居場所づくり ～教育支援室「スマイル」との連携～

唐津市立鬼塚小学校
校長 栗本 洋二

1 はじめに

唐津市は佐賀県の北西部に位置し、古くから大陸への玄関口として栄えてきた。多彩な文化が育まれるとともに、豊かな自然によって多くの恩恵がもたらされている。明治期には、英学校「耐恒寮」において後に内閣総理大臣となる高橋是清が教壇に立ち、辰野金吾や曾禰達蔵ほか日本の近代化に貢献する賢人たちが学んだ。当時日本の「今日的課題」であった英語を学ぶ最先端の環境がそこにはあった。

令和7年度唐津地区の学校環境を概観すると、学校数は統廃合の進む唐津市で46校（うち小中併設6校）、玄海町に1校（小中一貫）。海の学校、山の学校、島の学校、街の学校とバラエティ豊かである。児童生徒数は約9,000人、教職員数約1,000人。児童数が1,000人以上の過大規模校がある一方、一桁の極小規模校もある。「唐津は佐賀県の縮図」と言われるほど多様性に富んでいる。

唐津地区小学校長会は、唐津市28校及び玄海町1校の小学校長（うち6校は小中併設または小中一貫校のため中学校長）で構成され、年間10回程度の研修会を開催している。様々な教育課題について協議・情報共有を行っており、優先度の高い喫緊の課題の多くは、社会情勢の変化に伴う「前例のない（経験の少ない）」「正解のない（答えを持たない）」今日的教育課題である。

2 主題設定の理由

令和5年度における不登校の小中学生が、全国でおよそ34万6千人を超え過去最高を記録した。しかも年々増加の一途を辿っている。佐賀県においても2,180人と、国同様、前年度を上回り過去最多となった。楽しいはずの学び舎、貴重な人格形成の場である学校に子供たちの足が向かない。価値観が多様化する現代社会において、背景・理由は様々あるにしても、義務教育の根幹を揺るがす憂慮すべき事態である。

学校が知恵を振り絞り、限られた人的リソースを投入し取り組む不登校対策の何が足りないのか。どこに突破口があるのか。終わりの見えない対応に教員は疲弊している。

こうした中、学校の外に行政主導の「子供の居場所づくり」が進んできた。もちろん学校はこれらと密に連携を図ってきたが、そこから支援の方法や環境調整の在り方等のノウハウを吸収し、校内の支援体制構築に、新たな不登校を生まない学校づくりに活かさせていただこうか。

今回紹介したい唐津市教育支援室「スマイル」は、ここ数年来、卒級する中学3年生の高校進学率100%を達成し続けている。元気を取り戻すための効果的な支援があったことの証左である。今あらためて、この実績に裏付けられた知見に学び、不登校の予防に活かす観点から学校の中に子供の居場所をつくる方法・取組を整理することは有効であると考え、本主題を設定した。

3 研究の視点

(1) 居心地のよい環境づくりの在り方を整理

教育支援室において、児童生徒の学習や生活に対する意欲向上に一定の改善が見られた対応・取組について、学校で再現できる環境調整等の具体的方策を整理・提案する。

(2) 連携を活かす校長の役割を整理

教育支援室等、関係機関との連携をより実効性あるものにするため、特に職員の意識改革や教育課程の見直しなど学校経営の視点から校長の役割を明らかにする。

4 研究の実際

(1) 唐津市教育支援室「スマイル」の概要

① 場所

唐津市二タ子1丁目3-7 青少年支援センター4階

平成9年9月、旧西唐津公民館内に設置後数回の移転を経て、令和元年に上記へ移転

② 目的

家庭・学校と連携を図り、不登校児童生徒の社会的自立を支援し促進する。

③ 目標

ア 児童生徒の生活リズムの改善を支援し、意欲の喚起を図る。

イ 児童生徒の主体性を伸ばすための支援を行う（自主学習・体験学習等）。

ウ 家庭・学校との連携を充実させる。

④ 対象

唐津市内小中学生

⑤ 週および一日の生活スケジュール

	月	火	水	木	金
9：00	登校・朝の準備		登校 チャ レン ジ	登校・朝の準備	
9：20	読書			読書	
9：40	朝の会			朝の会	
9：50	自主学習Ⅰ			自主学習Ⅰ	
10：40	※学習内容は児童生徒が決める			※学習内容は児童生徒が決める	
休憩		休憩			
11：10	自主学習Ⅱ			自主学習	
12：00	※学習内容は児童生徒が決める			調理実習	
昼食・休憩		昼食・休憩			
13：00	畑作業	創作活動		ゲーム活動	
14：00	スポーツ活動	ボランティア活動	チャレンジ		
そうじ・帰りの会		そうじ・帰りの会			
14：15	下校		下校		

※基本的に小学生は保護者送迎による通級

中学生は自力通級が基本だが、生徒の状況により保護者送迎も可。入級後に自力通級を目指して練習を行う。

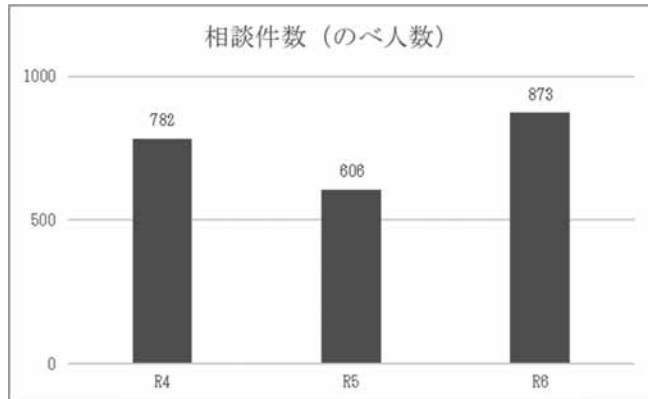
※児童生徒は、月2回、青少年支援センターでのカウンセリング有

※保護者との懇談（各学期末）、担任との懇談（1・2学期末）

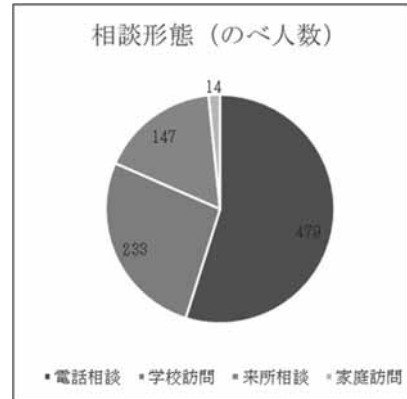
⑥ 利活用の状況

ア 相談等の状況（件数、形態）

スマイルでは、児童生徒への直接的な支援のほか、相談も受け付けている。相談件数は毎年おおむね増加傾向にあり、形態としては電話相談が最も多く、家庭訪問による相談もわずかではあるが実績がある。



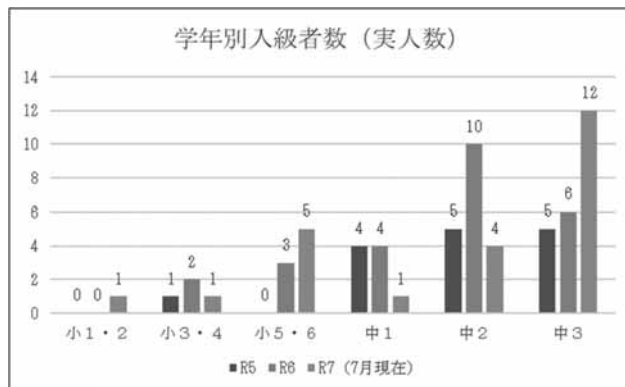
グラフ1 相談件数（R4～R6）



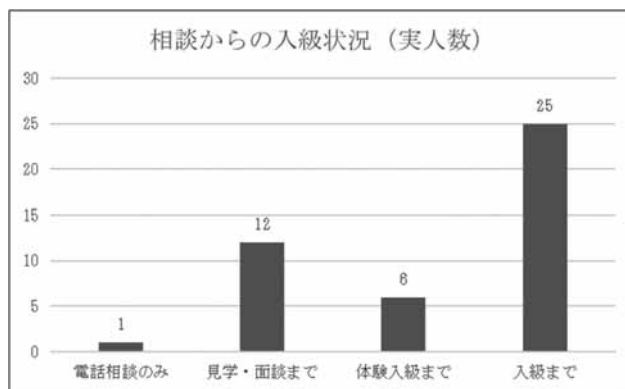
グラフ2 相談形態（R6）

このほか相談者の内訳は、令和6年度のべ人数873人のうち教職員（SC含む）が481人、次いで保護者が392人であった。卒級生、関係機関、一般の方からの相談はなかった。

イ 入級者の状況（入級者数、相談から入級に至る状況）



グラフ3 学年別入級者数（R5～R7）



グラフ4 相談からの入級状況（R6）

令和5年度から7年度の入級者数の推移を学年別にみると、全体的には小学生より中学生、とりわけ中2、中3が多くなっている。

小学生においても、令和5～6年度にはなかった低学年の入級や、高学年の増加傾向が見られるようになってきている。

令和6年度、相談から入級に至ったのは25人であった。

一方で、正式入級までには至らなかったものの、相談から体験入級まで合計19人に対し、助言や入級案内等、スマイルが何らかの対応を行っている。

令和6年度における学校復帰者は0人であった。

ウ 卒級者（中3）の進路状況 …令和6年度在籍の6名全て県立高校（全日制）合格

⑦ 入級に係る連絡等フロー

ア 不登校対策委員会等で話し合い学校からスマイルへ連絡

- 保護者からスマイルへ連絡
- イ 保護者から直接スマイルへ見学・面談依頼
 - スマイルから学校へ連絡
- ウ 見学・面談後に本人の意思を確認し体験入級開始（１～２週間程度）
 - 本人の意思を確認し入級願提出。体験入級開始日を入級日とする。

⑧ 学校連携における留意点

- ア スマイルへの通級は学校出席扱い
- イ 毎週水曜日に登校チャレンジ日を設定
- ウ 毎月１回の月末報告学校訪問を実施 学期末に担任とスマイル職員の面談あり
- エ 必要に応じて連絡を取り合う
- オ 翌月行事をできるだけ早くメール送付

⑨ 職員内訳（３名：教育委員会学校教育課所属 会計年度任用職員）

- ア 室長１名
- イ 指導員２名

(2) 不登校の予防に効果的と考えられる取組（提言）

① 生活リズムの改善 ～正しく食う・寝る・遊ぶ～

通級生のほとんどは、不規則な起床・就寝、少ない運動習慣・機会、スマホ等デジタルデバイスの長時間使用など、生活習慣において何らかの改善すべき課題を抱えている。

学校は、入級前に見られた心身の不安定さや意欲低下について、性格・特性との関連が強いと見立てており、その妥当性も高いと考えられるが、生活リズムの乱れが不調を引き起こしている可能性も否定できない。対面や電話によるこまめな励まし等の支援は必要であるが、実際に、望ましい生活習慣に近づくことで通級生は元気を取り戻している。

学校における具体的方策として、「強化月間」「集中取組週間」等、生活リズムの点検から改善を促す取組期間を設定することが考えられる。継続と徹底である。家庭の協力が欠かせないため、保護者に対しても重要性を丁寧に説明することが必要である。

校長の役割として、学校だより等情報発信の機会を活用し、趣旨説明のほか、点検結果の公表や学校での様子の変化等、繰り返し保護者・地域への理解・協力を求めていくことが考えられる。

② 主体性の尊重 ～自分との約束を守る～

スマイルでは、当日のスケジュールや今後の方向性について、基本的には本人に決めさせ必ず守らせている。一日の大まかなスケジュール枠が規定されているものの、学習内容等の中身については自主性に任されており、予定どおり完遂できた満足感を得ながら日々を過ごすことができている。ポイントは、自分なりの見通しをもつことである。

学校は、例えば学習に関して、総合的な学習の時間の他にも一斉指導型授業の脱却に向かってはいるものの、児童生徒が自ら学習内容や方法を自由に選択できるなど、国が目指す「学習の個性化」となると道半ばではないだろうか。

次期学習指導要領改訂に向かう動きの中で、教育課程の柔軟な編成に関する議論が進ん

写真1 生活リズムチェック

写真2 一日の見通しと感想

でいる。自由進度学習とまでは至らずとも、単元の終末に児童生徒がそれぞれ学ぶ内容や学び方を選択できる時間を設定するといった単元計画の工夫によって、「期待感」「存在感」「効力感」「充実感」を得ることができると考えられる。(浜玉中：単元終末探求型の単元デザイン)

校長には、教務主任や教科担当を軸に、単元計画を一層重視した教育課程の編成を進め、また、教員集団の中に「子供が主役、教師は伴走者」の共通認識を根付かせることが求められる。

③ 柔軟な対応 ～できない自分も受け入れる～

通級生は、学校の宿題を最後までやり遂げたい思いが強いが、本人にとってレベルが高すぎたり集中力が持続しなかったりすることで、強い不安を抱えることがある。また、登校チャレンジで学校には行くものの、校舎内に入れない葛藤から突然苦しくなることもある。そうした場合には「できるところまでやればよい」「休んでよい、休むのは悪いことではない」との声掛け、価値付けを行うことで、少しずつ自分への寛容さを育んでいる。



写真3 落ち着ける空間

学校では、自主・自立を目指し一定程度の厳しさをもって教育活動を展開しているが、適応が難しい児童生徒が増えており、潜在的にも相当数いることが予想される。

そこで、誰にでも苦手や不得意があることを知り、本人も周りもそれぞれ許容する風土づくりを徹底したい。また、UD教育の視点から、「誰でも」心を落ち着けることができるスペースを校内に設置したり、特に小学校においては、教科担任制やチーム担任制を導入したりすることによって、心理的負担を軽減させることも考えられる。

校長には、空き教室が少ない昨今、校内（もしくは校外）に安心できる場所を確保する空間マネジメント力が問われるとともに、児童生徒にとって、担任以外に事務室の職員や地域ボランティアの方々など「ななめの関係」を広げるといった人的環境の整備も求められる。

④ 異学年の交流 ～広い世界に目を向ける～

様々な活動の中で、自然発生的に教え、教わる場面が生じている。教える側は感謝されることで自己有用感が得られ、教わる側も解決できた喜びや満足感を味わうことができる。Win-Winの関係である。

同学年同士のコミュニケーションで失敗した経験があったり、コミュニケーションそのものに苦手意識があったりする児童生徒にとって、こうした異学年との関わりの中で感謝・承認される経験は自信を取り戻すきっかけとなっている。



写真4 交流が進む机の配置

学校でも、従前から特別活動に係る行事等において異学年交流を仕組んできたが、「承認の場を創出する」という視点であらためて目的・実施方法等の見直しを行い、一層の充実を図ることが必要である。また、小中あるいは幼保小中といった校種を超えた交流は更に効果的であることから、体育大会や文化発表会などの合同開催や一部参加もぜひ検討したい。

機会拡充のため、校長には、近隣学校間の情報交流を密にし、あるいは交流先を新規に開拓するなど、これらの「橋渡し役」が求められる。そこから、異学年交流の場を、幼保小連携や小中連携といった枠の中（カリキュラム）に位置づけ定例化していくことが望ましい。

5 成果と課題

(1) 成果

① 自己肯定感の高揚

スマイルでの活動を「学校出席扱い」とすることが、児童生徒の自己肯定感を高めてきた。通知表の出席日数は、通級生及び保護者にとって重大な関心事であり、貴重な承認の機会となっている。

また、少人数で似たような境遇・背景にある者同士の集団であり、かつ常時近くで指導員に見守られているという心理的安全性が一定程度担保されている中、より交流の効果は促進される。

学校においても、「承認の機会」「安心できる場」を安定的に確保することができれば、児童生徒が自己肯定感を高め新たな不登校を生まないことが期待できる。

② 一定の進路保障

数年来、スマイル卒級生（中3）の高校進学率が100%を達成し続けている。中でも、全県募集枠のある市内県立高校への入学が増えており、複数名から高校での主体的な活動の様子が職員に生き生きと報告されている。通級の期間で自信を付け、新たな人間関係構築にも前向きである。そうした生徒が卒級生としてスマイルに遊びに来て話してくれることから、通級生のモチベーションアップにつながっている。

今は学校に足が向かなくとも、自分のペースで学び、活動が続ければ先が開けることが証明された。学校における進路指導にも厚みをもたせることができる。

(2) 課題

① 活動スペースと職員の不足

令和7年7月時点で通級生が24人。令和6年度の年間在籍数25人とほぼ並んだ。令和6年7月の在籍数は12人と倍である。使用可能なスペースを考えると既にぎりぎりの人数と考えられる。対応する職員も室長と指導員合わせて3名であり、個別指導の機会も確保しづらくなってきている。

拡充を要望したい一方で、やはり学校が、スマイルの対応を参考にしながら校内支援体制の見直しを進める必要がある。

② 危機管理の限界

不登校要因の複雑化・多様化（特性、いじめ、家庭環境等）に伴い、個別の対応も難しくなっている。加えて、異常気象（酷暑、豪雨、大雪等）も年々深刻化しており、特に中学生は自力通級を目指している中、様々な判断や対応など限られた職員では限界がある。

関係学校は、危機事象の発生に備え、スマイルと各種判断基準を共有するとともに、緊急時の連絡体制を確立しておくことが必要である。また、課題①と同様、学校は、スマイルに頼らなくてもよい体制づくりを進めることが重要である。

6 おわりに

唐津市では、スマイルのほかにも「不登校対策特認校（高島小学校）の設置」「学校選択制度の導入」など子供の居場所づくりを進めている。学校には、こうした多様な受け皿の存在をもっとよく知り、よく活用することが求められている。持続可能な支援体制のためである。

新たな不登校を生まないために、連携や体制整備といったテクニカルな視点はもちろん大切だが、生身の教師として、目の前の子供の声を聞き、気持ちを通じ合わせることを忘れてはならない。子供が搾り出す言葉には、いろいろな心が貼りついている。